

愛他的同調傾向の把握

中 村 陽 吉

要 約

人びとの同調傾向を測定するためのテストを試作し、その信頼性妥当性などを検討した結果、このテストは集団内の他成員の立場を配慮したために生じる同調傾向を測っているものと考えられた。

そのことをさらに検証するために、集団内で他者の立場を配慮することと理論的にかかわりをもっと思われる Sawyer の altruism scale と上述の同調性テストとの関係をみた。「同調性テストにより同調的と判定された人たちは、しからざる人たちより、Sawyer の尺度による a 指数が高くなるであろう」という仮説を女子大生から得たデータによって検討し、ほぼ仮説を支持する結果を得た。このことから、集団内で一致した結論を求めねばならないときに生じる同調は少なくとも部分的には愛他的同調傾向に根ざすものと考えた。

I 目 的

本報告の主たる目的は、“同調性テストの結果にもとづき同調型と判定された人びとは、非同調型や中間型と判定されたものに比して、愛他心尺度において一層他者援助的傾向を示すであろう”という仮説の当否の検討を行うことである。しかしながら、具体的な検討に入る前に、このような仮説がいかなる文脈のもとに導出されたものであるかを明かにしなければならないし、同調性テストと愛他心尺度とのそれぞれについても若干の検討を加えることが必要であろう。

II 同調性テストの検討

ここで同調性テストとよんでいるものは、中村 (1967) が試作したもので、簡単な質問紙形式をとっている。その主たるねらいは、仮設的場面の中

でいくつかの状況認知の手掛りを提供し、その手掛りを同調非同調の決定因として有意なものとするか否かという点から、同調性にかかわる個人差を把握することにある。

このテストでとり上げた認知的手掛りは「自分の立場を支持してくれる者の存否」と「時間の制約の有無」との二つである。これらは、同調あるいは非同調への刺激価がそれほど強くはないから、個人の同調傾向の差を反映しやすいものと判断されたからである。若し、「自分の主張の正当性を保障する客観的根拠の有無」とか「専門家の判断の有無」などを状況構成因の一つとして用いると、個人差の生じる余地はほとんどなくなり、大部分の人たちが一律に同調あるいは非同調の反応を示してしまうであろう。これらの要因は、価値的方向が一義的であり、同調あるいは非同調への刺激価が強いからである。ところが、われわれのとり上げた前述の如き手掛りは、反応の方向を一義的に決めてしまうほど強力な要因であるとは思われない。たとえば、集団の中でほかの人がみな意見が一致しているのに、自分だけが違った考え方をしていることがはっきりしてきたばあいと、集団内で自分ともうひとりの人とは同じ意見だが、他の人たちは一致して別の考え方を支持しており、ふたりだけが少数意見になったばあいとでは、集団基準への同調あるいは非同調の反応が決定的に異なるとはいえないであろう。ある人にとっては、前者のばあいは同調しても後者のばあいのようにひとりでも他者の支持があれば非同調になりうるのであろうが、別の人にとっては、支持者がもうひとり居ても居なくても同じことで断固自説を主張しつづけることのできる場面として受けとられるであろうから。

具体的な質問紙の内容構成は (Box 1) のとおりである。

このテストが測定し得ているもののもつ心理的意味を多少とも明瞭化するために、他のいくつかの心理的反応との関係を分析した結果は既に報告した (中村, 1967, 1969) が、主要部分のみを簡単に触れておこう。

まず、このテストを男女大学生約300名、某銀行男女職員約200名に実施したところ、いずれのばあいも男性よりも女性において同調型と判定されるも

(Box. 1) 同調性テストの内容

状況…あなたは、ほかの五人の人たちと、グループにとって重要な問題について、グループとして一致した秀れた結論をもとめるためにディスカッションをしています。そして、そのディスカッションはもうすでに二時間近くつづけられ、出るべき意見は出つくしてしまいました。ところで……

A—(1) このグループ・ディスカッションに許された時間はもう五分ほどしか残されていない。ところが、あなた以外の五人の人たちは完全に意見が一致して、一つの結論が出ているのだけれども、あなた一人だけが意見がちがひ、納得できないでいる。このとき、あなたは……

- (イ) ほかのメンバーの気持を考え、気持よく自説を棄てて、多数意見をグループの結論とすることに賛成する。
- (ロ) しかたがないから多数意見を、自分を含めてグループの結論とすることを承認する。
- (ハ) 多数意見を結論とすることは認めるけれども、自分は意見をかえないと主張する。
- (ニ) 多数意見をグループの結論とすることは、グループのためにならないと主張してゆずらない。

A—(2) A—(1)と同じ条件であるが、ただ多数意見は四人で、あなたと同じ意見の人がもう一人います。このとき、あなたは……

- (イ) ほかのメンバーの気持を考え、気持よく自説を棄てて、多数意見をグループの結論とすることに賛成する。
- (ロ) しかたがないから多数意見を、自分を含めてグループの結論とすることを承認する。
- (ハ) 多数意見を結論とすることは認めるけれども、自分は意見をかえないと主張する。
- (ニ) 多数意見をグループの結論とすることは、グループのためにならないと主張してゆずらない。

B—(1) このグループのディスカッションには、とくに時間的制約はない。しかし、あなた以外の五人の人たちは完全に一致して、一つの結論が出ているのだけれども、あなた一人だけが意見がちがひ、納得できないでいる。このとき、あなたは……

- (イ) ほかのメンバーの気持を考え、気持よく自説を棄てて、多数意見をグループの結論とすることに賛成する。
- (ロ) しかたがないから多数意見を、自分を含めてグループの結論とすることを承認する。
- (ハ) 多数意見を結論とすることは認めるけれども、自分は意見をかえないと主張する。
- (ニ) 多数意見をグループの結論とすることは、グループのためにならないと主張してゆずらない。

B—(2) B—(1)と同じ条件であるが、多数意見は四人で、あなたと同じ意見の人が一人います。このとき、あなたは……

- (イ) ほかのメンバーの気持を考え、気持よく自説を棄てて、多数意見をグループの結論とすることに賛成する。
- (ロ) しかたがないから多数意見を自分を含めてグループの結論とすることを承認する。
- (ハ) 多数意見を結論とすることは認めるけれども、自分は意見をかえないと主張する。
- (ニ) 多数意見をグループの結論とすることは、グループのためにならないと主張してゆずらない。

のが有意味 ($P < 0.05$) に多かった。これは、「女性は男性に比して集団活動を課題志向的というより相互作用志向的に行い、他者との調和や社会的承認を重視する傾向があり、結果として集団内で同調しやすいであろう」という B. M. Bass (1961) の解釈や、集団圧による同調をあつかった従来の研究61ケースの研究結果を整理して、そのうち21例は女性が同調傾向大であるという結果を得ているのに男性の方が同調大なる結論を出した研究はわずかに2例しかなかった（もっとも、残りの38例はいずれが大ともいえないという結果なので、必しも女性が同調大という結論にとってポジティブとはいえないが）ことを指摘している A. H. Eagly (1978) の分析などと方向を同じくしているものといえよう。

次に、実際の討議活動中に示す行動やその行動についての認知などと同調性テストとの関係をみると、討議中の実際の意見変化量においても、また、主観的な意見変化量についても、同調型の方が非同調型よりも変化量が大であり、討議結果への満足度では、非同調型の人たちが不満足を訴える傾向が大であった。これらの結果は常識的知見と矛盾しないものである。

ところが、N. A. Witkin (1962) による場面依存型 (field dependent type) の人たち (Rod Frame Test により測定) は予想に反して非同調型の人が多く、また実験者の暗示に応じて反応をかえる（一枚の画用紙上に描かれた沢山の小さな黒点をチラリと見せてその数を判断させるときに、実験者が数についての暗示を与える）のも非同調型に多かった。これらの結果はいわゆる同調傾向の特徴と思われるものと一致しない。被暗示的傾向が大きいひとや、場面によって反応を規定される傾向の強い人は同調傾向も大であろうというのが、従来の研究知見から導出される予想だからである。この点からすれば、ここで用いる同調性テストは個人の同調傾向を測定するのには不適當との見かたも生じうるであろう。しかし、先述の如く、このテストで同調型と判定された人は非同調型の人びとに比して現実の集団討議活動の中では同調的にふるまう（あるいは、本人はすくなくとも同調的にふるまったと思っている）傾向が大であることも見出されているので、この段階で一方

向的な結論を下すことはできない。

ところで、先に引用した B. M. Bass の考え方によれば、女性が同調的なのは課題志向的傾向がすくなく、相互作用志向的傾向が強いためであるということになり、相互作用志向と同調傾向との正の相関が前提とされている。しかしながら、集団圧による同調の古典的研究として名高い S. E. Asch (1951) の実験では、他成員の反応を知りうるだけであって、自分が集団の一員として受け容れてもらえるか否かなどは余り問題になり得ない状況が用いられている。そこでは自分の反応が正しか否か（他の人の判断と一致しているか否か）が各被験者にとっての関心事ではあるが、他の成員が困るか否かとか、他の成員の期待に応じているか否かなどは意識外のことになるであろう。相互作用志向という表現にはいささか似つかわしくない心理的状态からも同調行動が引き出されることを示している。相互作用志向ではないとはいえないとしても、すくなくとも、自分の判断が正しくありたい、間違っって他の人に対して恥をかきたくない、そして、まわりの人たちと自分との意見や判断の違いは自分が間違っていることの証拠かも知れないという自己防衛的な傾向が同調を生み出していることを示した実験といえよう。

このようにみてくると、同調行動を生起させる心理的要因として、自己防衛の必要性和他者との関係を配慮することの必要性和を分化させることが可能であるように思われる。Asch タイプの実験場面は前者にもとづく同調をあつかっているのに対して、われわれの用いている同調性テストはむしろ後者に重点をおいた同調をあつかっているのではなからうか。もし推論が妥当なものであるならば、Asch タイプの実験で同調傾向を強く示す人たちは、しからざる人たちよりも、権威からの暗示への被暗示的傾向も大となるだろう。自分が間違いたくないのだから。しかし、他方、われわれの同調性テストは必ずしもこのような結果を得る必要はないし、事実点の数についての実験者による暗示と同調傾向とはむしろ逆の関係であったことは前述の通りである。

Asch タイプの同調と被暗示的傾向との関係については、R. S. Crutch-

field (1955) の研究が上述の推論に対しては肯定的な知見を提供している。Crutchfield は Asch の実験をもっと効率的にして、多くの被験者から資料を得られるように改善した上で、同調傾向と人格特性との関係を分析した。その結果、同調的傾向の強い人はしからざる人に比して自信に欠け、先入観に左右されやすく、権威主義的であり、他者依存的などの特徴を示すことを見出した。Crutchfield の実験でも Asch の実験の変形であるから、成員たちは機器的に他者の反応を相互に知りうるだけであって、集団討議のような生の相互作用は成立しない。その場面では集団としての一致が求められているのではなくて自分の判断が正しければよいのであって、その点では Asch のものと同じ性質の状況が作られている。したがって、そこで同調的傾向を示すばあいは自己防衛的傾向がその背後で機能しているのであろう。それ故、パーソナリティ特性も被暗示性と結びつきやすい特徴をはっきりと示しているものといえよう。

それならば、われわれの同調性テストで同調型とみられる人たちは、自己防衛よりもむしろ他者との関係を配慮する傾向を持つ人たちであり、被暗示性ともあまり関係がないと考えられているのだから、彼らのパーソナリティ特性は Crutchfield の実験で同調的であった人たちとは異った特徴を示すのではないかと思われる。そこで同一被験者群（大学生男女各約 100 名）に同調性テストとパーソナリティテスト（Y-G テスト）とを実施し、この点を検討してみた。そして、予想どおり Crutchfield の見出したパーソナリティ特性とはむしろ逆の諸特徴を見出した。すなわち、同調型の人とは非同調型の人に比して気分の変化少、非抑うつ的、客観的、協調的、非攻撃的、非神経質、思考的外向の傾向を示した（とくに女性においてこれらの特徴が顕著であった）のである。

このような一連の分析から、われわれの試作した同調性テストは、集団として一致した結論を求めていくことが要請されている場面で、自分が自説を固執することで他者が蒙る迷惑を配慮したところに生じる同調傾向を測定しているのではないかとの結論に到達しうる。そして、もし、この結論が正

しいとすれば、このテストで同調型と判定された人は、他の場面でも他者の立場を配慮する傾向が大であろうという仮説を導出しうる。他者への配慮がもっとも端的に表出されるのは他者に対する援助行動である。それ故に、われわれがつぎになすべきことは同調性テストの結果と他者援助傾向との関連性を明らかにすることである、しかし、その前に、同調性テストの「型の判定」法について考察しておく必要があるだろう。

Ⅲ 同調性テストにおける「型の判定」

この同調性テストは (Box 1) でも明らかなように A—1, A—2, B—1, B—2 の 4 場面にそれぞれ (イ)~(ニ) までの選択肢のいずれかで反応するものであるが、従来は「型の判定」に際しては 4 場面とも (イ) 或は (ロ) を選択した人が同調型、4 場面とも (ハ) 或は (ニ) で反応した人は非同調型、場面に応じて (イ) (ロ) から (ハ) (ニ) までに跨がって反応した人たちを中間型 (或は移行型) として処理してきた。Ⅱ でのべた結果はすべてこの形式によっている。このような処理法をとったのは、選択肢 (イ) がもっとも同調的で (ロ) (ハ) を経て (ニ) がもっとも非同調な反応であるとの前提に立ち、しかも、(イ) (ロ) は集団の多数派の見解を承認する反応だが、(ハ) (ニ) は自説を曲げない立場を表明している筈だからである。また、A—1 は同調に有利な状況であり、B—2 は極めて同調的反応を示しにくい場面を描いたつもりであって、中間にほぼ同程度に同調をさそう場面として A—2 と B—1 が描かれた。従って、このテストに描かれた場面状況を正確に理解し、まじめに反応するならば A—1 への反応は他の 3 場面への反応と同じかあるいはそれより同調的である筈だし、B—2 は逆に他の 3 場面と同じか一層非同調かで反応されるものと思われる。事実、このような仮定に反した反応を示したものは男女大学生 300 名中 8 %, 銀行員 225 名中 12 % 程度であった。これらの者の反応は不正確である危険もあるので従来のデータでは除外してある。

ところで、このような処理法をとると、ある程度は中間型の出現数が多くなりがちで、男性の資料ではときには同調型に該当するものが極端に少人数

になったりしたこともある。しかも、中間型に入る人たちは、時には同調型の人と傾向が似ているかと思えば、別の分析のときは非同調型に近い反応を示すことがあって、その特徴を捉えることがむずかしい。このことは、中間型として一括されている人びとをもう少し細かく分けてみることの必要性を示唆している。その一つの方法は、このテストの結果を得点化して処理し、同調・非同調の程度を量的に表現することである。

そこで、今回、結果の量的表示化の検討とあわせて、上述した本テストの前提(A—1～B—2へと非同調を生じやすくしてあり、(イ)～(ニ)へと非同調的反応としてある)を確認する目的をもって、この同調性テストの一次元性を尺度解析(scale analysis)の手法で検討してみた。本学心理学科2年62名を対象として同調性テストを施行し、その回答に対して、(イ)は3点(ニ)は0点の4点尺度で得点化し、4場面の計で12点から0点までに分布しうるものとして尺度解析を行ったところ再現性係数は0.9強の結果であり、同調性テストの結果を量的に表現することの意味も、またこのテストの前提とされていたことの妥当性もほぼ保障されたものといえる。ただし、12点から0点までの同調尺度とすると、少しく細かすぎ、結局、数点ずつまとめて処理したくなるし、従来の型の判定との対応が多少不明確になる(たとえば、得点10の人たちの中に、イイロロの人もいれば、イイイハの人もある。前者は同調型だが後者は中間型に分類されていた人たちである)のが難点である。そこで、イロはいずれであっても1点、ハニはいずれでも0点とし、4場面を通じて、最高4点～最低0点の4点尺度として処理してみる。高得点順に成員を配列し、各場面への反応を示すと(Fig 1)のようになり、これの再現性係数は0.968と十分満足できる値を得た。また、この図で明らかなように、このような処理で異常反応を示したものは僅かに1名のみ(A—1よりもA—2の方が同調的な反応)であり、このテストが一義的に受けとられていることの裏づけとなるだろう。いずれにせよ、このように、4点尺度とすれば、4点の人は従来の同調型、0点の人は非同調型、3～1点が中間型と一義的に対応するし、しかも中間型のみは3点、2点、1点と3分割して考察

(Fig. 1) 同調性テストのスケーログラム

[illegible]

することも可能となるので、今後の処理はこの4点尺度法をとることが望ましいと思われる。

III 他者援助傾向の測定

上述の同調性テストは、集団内での討議場面で少数意見のものが示す歩み寄りの程度を同調として捉えている。それ故、その歩み寄りとは自己防衛というよりは集団内の多数の成員たちの立場を配慮した結果であろうとみられた。しかし、他者の立場を配慮するといっても、このばあいは、いわゆる自己犠牲的な他者援助ではなくて、自分が集団にゆずることで集団の動きが円滑になれば、結果としてその集団の一員である自分にも利益があるであろうし、次の機会には他者の側が譲歩してくれるかも知れないというものだ。これは A. Gouldner (1960) や P. M. Blau (1964) らのいう相互性規範 (reciprocity norm) や交換理論にもとづく他者援助に近いものであろう。

このように考えてくると、他者援助的傾向といっても、いわゆる自己犠牲的な傾向ではなくて、なにがしか自分にも得るものがあることを前提とした他者援助的傾向こそが同調性テストによる同調傾向と正の連合関係を示すのではないかという仮説が引き出されてくる。この点を検討するためには、他者援助的傾向の測定具としては、J. Sawyer (1969) によって考案された愛他心尺度 (altruism scale) を用いるのが適切なのではなかろうか。なぜなら、Sawyer の尺度は Blau の理論を基盤として作られたものだからである。

この Sawyer による援助傾向の測定具を翻案したものについてはそのねらいや結果の処理法などを既に報告 (中村1976) したので、ここでは簡単にその要旨のみをのべる。この尺度の内容は (Box 2) の通りであるが、これは学生用であって、職場人のためには別の場面が用意されている。また状況文中の下線部分は、相手との友好的関係が強調されており、全般に援助的回答のレベルを高くするので、「その学生は同じ学科の人ですが、演習では一緒になったこともなく、ほとんど話したこともないので、どんな人か全然わ

(Box. 2) Sawyer の愛他心尺度

あなたが次のような状況におかれたばあいを想像して問に答えて下さい。

状況——学年はじめに、あなたは専攻領域にとって大切な演習を履習することになりましたが、その演習の受講者はあなたともうひとりの学生とのふたりだけでした。その学生はいつもあなたと一緒に同じ演習や講義に出ている人で、あなたとは大変よく気があって、気持ちよく一緒に勉強していける大の仲良しです。

ところで、担当の先生は、出席すれば落第点Dはつけないと言いました。ですから、ふたりは続けて出席していればABCいずれかの評点が保障されたわけです。もちろん、先生がふたりに同じ点をつけるとは限らないので、ふたりが学年末にとる評点の組合せの可能性は9組——ふたりともAとか、一方がAで他方がBといったぐあいに——あります。

(問) さて、相手の評点とあなたの評点との9組の組合せのうち、あなたにとってどの組合せが好ましく、どれが好ましくないかを好ましい順に(1が1番好ましい) 順番をつけ、回答表に記入して下さい。なお、同程度に好ましいものには同順位をつけ、以下の順を繰上げて下さい。

記入例

		相手の評点		
		A	B	C
あなたの評点	A	3	2	1
	B	4	4	2
	C	6	5	4

回答記入表

		相手の評点		
		A	B	C
あなたの評点	A			
	B			
	C			

かりません」などと変えると相手との関係が中性的となる。

Sawyer によれば、2 者間の相互作用の結果として生み出されるものが両者のそれぞれにいかほど好ましいものであってほしいと願うかによって、個人の援助傾向がわかれるという。2 者のうち一方を主体 P とし、他方を相手 O としたとき、① P は自分の利益を増すことと同程度に O の利益も増すことを願う……協同的 (coop.) ② O の利益は関係なく P は自分の利益増だけを願う……個人主義的 (ind.) ③ P は自分の利益が増すと同時に O の利益が低下し、(P-O) の値が大きくなることを願う……競争的 (comp.) の 3 型である。この 3 型を一つの尺度上の数値である程度区別できるようなテストとして上述のものを考え、他者援助的である程度を下のような式で求めることにしている。そして、altruism 指数 a が +1.00 は coop. O は ind. -1.00 は comp. の典型だという。しかし、この指数は +1.00 や -1.00 を超える数値をとることがあるのは問題である。

$$a = \frac{\sum C_o - \sum A_o}{\sum C_p - \sum A_p}$$

なお、(Box. 2) の回答記入例をみると同順位がかなりあるので、これを異順位だったばあいの中央値に読みかえ、以下順位を繰下げると (Tab. 1) のようになる。この例を上式で計算すると $a = -0.61$ となる。

IV 愛他心尺度の検討

Sawyer による愛他心尺度を日本版としたものについて多少検討した結果も報告済み (中村 1976) であるが、その主要点は次の通りである。

まず、この尺度の信頼度に関しては、同一回答者に 2 ヶ月の間隔で回答を求めたばあいの相関係数は +0.78 であり、特に変動が激しいというようなことはない。ただし、1 回目より 2 回目の回答の方が非援助的 ($P < 0.05$) 傾向を全般的に増しており、今後検討を要する問題ではある。

Sawyer は彼の尺度の妥当性を検討するために、経営学コースの学生と Y M C A コースの学生とのスコアの比較を行ない、社会福祉に関心が高いと

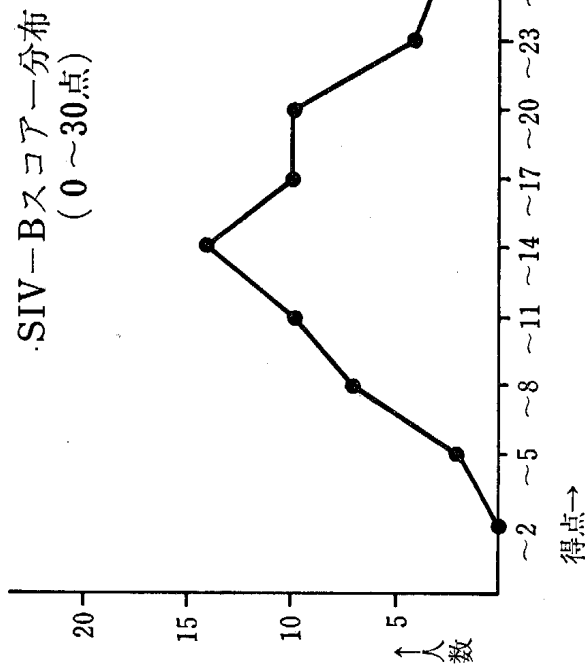
思われるYMCAコースの方が、企業経営の効果に関心を持つと考えられる経営学コースよりもa指数が有意に高かったことを見出している。われわれも、キリスト教系の女子大学の学生（心理学専攻）と某私立大学経営・経済学部の学生との比較を行ない、経営・経済学部の学生の方がa指数が低い（ $P < 0.05$ ）ことを見出した。もっとも、これは某私大のデータの $\frac{2}{3}$ は男性のものなので、女子大学生との差は性差の反映かも知れない。しかし、私大の被験者は上述のように男の方が多いのではあるが（全79名中男53名、女26名）、一応、この中で男女の比較を行ったところ、a指数の平均がほとんど同点であったことからみて、上述の結果は性差によるものではないと考えてもよいであろう。

なお、このほかの二、三の点でも米国における Sawyer のデータと、われわれのデータとは極めて相似の傾向を示しており、日本語への翻案後も Sawyer の尺度の特徴はかなりの程度まで保持されているものと考えたい。とはいえ、この程度の分析では、この尺度で得られたものの意味がはっきりしないので、今回さらにいくつかの分析を追加してみた。

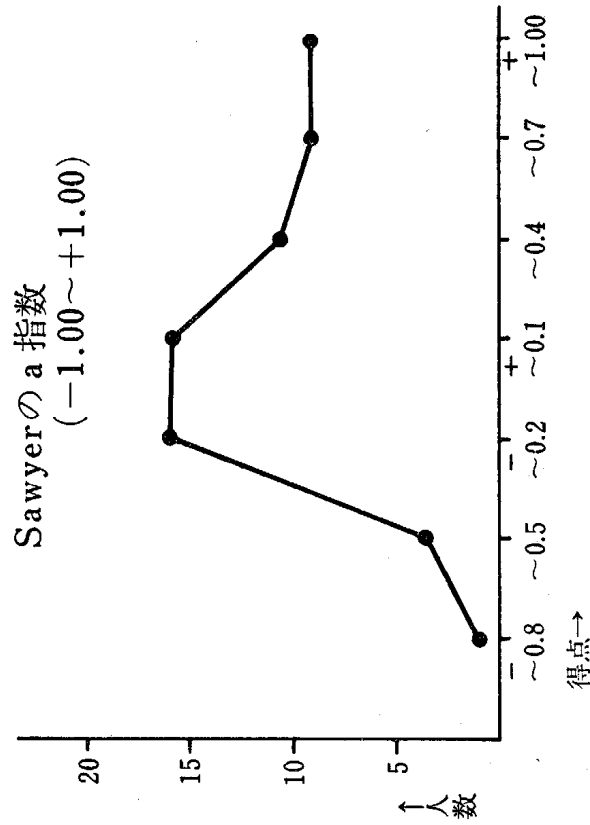
まず、Sawyer のものと同じく人びとの他者援助的傾向の個人差を測定しようとしているものの一つとして SIV (Survey of Interpersonal Values) のB尺度 (Benevolence scale) をとり上げ、これと Sawyer の尺度との関係をみよう。SIV は L. V. Gordon と菊地らとの共同作業で作製検討されているもの（菊地ら、1974）で、対人関係に関する価値観の測定に重点をおいたものである。そして、全部で6次元からなっており、その内の1つとしてB尺度が含まれている、これは、「他の人々の幸福のために働く」とか「自分のものを他人と分けあう」、「困っている人に同情する」などの表現でも明らかなように自己犠牲的・社会福祉的なものに重点がおかれており、Sawyer の尺度が相互交換原理に立っているのとは対照的である。しかし、いずれも個人の他者援助傾向を測定することを目指しているのだから、両者が全く無関係であるとは思われない。

SIV のBスコアは0～30点（高得点ほど他者援助的）に分布しうるも

(Fig. 2a)



(Fig. 2b)



(tab. 1) a 指数算出のための例

あなたの 評点(P)	相手の評点(O)			ΣAp 7.5	ΣCp 23	ΣAo 19	ΣCo 9.5
	Ao	Bo	Co				
Ap	4	2.5	1				
Bp	6	6	2.5				
Cp	9	8	6				
Σo							

(tab. 2) B 指数と a スコアーとの関係

B スコア	a 指数		計
	低	高	
下	21	11	32
上	11	19	30
計	32	30	62

(註) 表中 a 指数の低群は0.00より
マイナスイクスのもの、高群は+
0.01よりプラスよりのものであ
り、Bスコアの下の群は14点以
下、上群は15点以上のものであ
る。

(tab. 3a) a 指数と実験参加

a 指数			計
低	高		
15	14	参加	29
16	14	不参加	30
31	28	計	59

(tab. 3b) SIV-B スコアーと実験参加

SIV-B			計
下	上		
15	14	参加	29
16	14	不参加	30
31	28	計	59

(tab. 3c) M-C スコアーと実験参加 (田村・山本 1977年より)

M-C スコアー			計
～30	30～		
9	20	参加	29
20	10	不参加	30
29	30	計	59

のだが、62名の女子大生に実施した結果の得点分布は (Fig. 2a) の通りであり、同じ回答者に Sawyer 尺度を実施したばあいの a 指数の分布は (Fig. 2b) の如くである。この二つのスコアをそれぞれ中央値で二分割 (同得点者がいるため多少人数にずれが生じた) すると (tab. 2) となり、これは $\chi^2=4.08$ ($P<0.05$) で、ある程度の連合傾向を認めることができた。なお、念のため SIV 内の他の 5 次元のそれぞれと Sawyer の a 指数との連合関係をみたが $P<0.05$ レベルで有意な関係を示したものは皆無であった。したがって、一応、Sawyer の a 指数と SIV の B スコアとの間には、同じく他者援助傾向を測定しているものとしての連合傾向が認められたものと考えたい。

次には、Sawyer の尺度と実際の援助行動の生起との関係をみるために、心理学の実験への被験者になるという行動を援助行動の指標として用いてみた。田村・山本 (1977) は卒論用の実験のために被験者になってほしいと女子大心理学科 2 年生 59 名に依頼した (この研究については後述する)。この被験者依頼は実験演習の授業のために学生が集合したときに行われたのではあるが、授業とは関係なく、先輩の卒論研究への援助依頼であり、強制力はないのであるから、このばあいの実験参加は他者への援助行動とみることができないのではないかと考えられた。そこで本稿の筆者は、この 59 名全員に Sawyer の尺度を実施し、実験に参加したものとしからざるものとで比較してみた。しかしながら、結果は否定的であり、(tab. 3a) で明らかなように、全く両者に連合関係はみられなかった。これは、実験被験者としての協力援助は相互性規範よりも自己犠牲的奉仕の傾向が強いためなのかも知れない。もしそうであるならば、実験参加行動は Sawyer の尺度とは関係がつかなくても SIV の B スコアとは連合傾向を示す筈である。ところが、(tab. 3b) のようにここでも全く連合関係を見出せなかった。このような結果は、SIV—B や Sawyer 尺度がいずれも援助行動傾向とかかわりのないものを測定しているのか、あるいは実験参加行動が援助行動の指標としては不適當であるのを示しているのかも知れない。ところで、前述した田村ら

は、被験者依頼に応じることの有無と社会的承認欲求 (Marlowe-Crowne scale により測定) との関係を分析し、(tab. 3c) の如くかなり強い連合関係を見出している。しかも、われわれが M—C 尺度と SIV—B や Sawyer 尺度との関係をみたところ、いずれもはっきりした連合傾向を見出すことはできなかった。したがって、このばあいの実験参加行動は他者援助というよりも、自らの社会的承認欲求を満たすためになされたのであろう。そして、社会的承認欲求の高低は、ここで測定された範囲での援助傾向とはかかわりを持たないようである。なお、R. Rosenthal ら (1975) によれば、志願してくれた被験者は承認欲求が高いことを見出した研究は従来もいくつかあるようではあるが、今回の田村らのばあいは、実験演習の授業に集合したときに実施されているため、承認欲求との関係が一層顕著になったのかも知れない。

V 同調性テストと愛他心尺度との関係

いまや、本稿の目的の項でのべた仮説を直接的に検討できる段階に到達した。同調性テストは、集団内の他成員の立場を配慮し、どちらかといえば他者援助的傾向と結びつくような同調傾向の程度を測定しているものと判断された。その判断が妥当なものならば、このテストにより同調傾向ありとみられた人は他者援助的傾向が大でなければならない。ところで、他者援助的傾向の測定具としては Sawyer の愛他心尺度が比較的有効なのではないかと考えられた。それは、一つにはこの尺度はいわゆる相互性規範説や交換理論などを背景に考えられたものであり、自己犠牲的援助との結びつきが薄いと思われる集団内同調の特性に適合していると判断されたからであり、二つにはその信頼性や妥当性の検討結果にある程度満足し得たからである (もっとも、現実の援助行動への参加度との関係は今後一層の検討を必要とするのではあるが)。そこで具体的操作としては同一被験者群に、同調性テストと Sawyer の愛他心尺度とを施行し、同調傾向大と判定されたものの a 指数の値はしからざるもののそれより大であるという仮説が支持されるか否かを見

ることになる。

東京女子大学心理学科2年生62名にこの二つのテストを実施し、従来通りの型の判定を行ない、同調型16名、中間型22名、非同調型24名に分けてSawyer 尺度のa指数の高低をみると (tab. 4a) のようになる。同調型と非同調型とを比較すると、傾向としては同調型に指数の高い人が多いのであるが、 $P < 0.05$ レベルでは有意でない。中間型は非同調型と同じ傾向であるのでこの両者を合せて (非十中)、それと同調型との比較をすると $\chi^2 = 3.58$ となり、 $P < 0.05$ レベルではわずかに有意水準におよばない。

そこで、先に「同調性テストの型の判定」の節でのべたような得点化を行ない、各得点ごとのa指数の高低をみると (tab. 4b) となる。この表で明かなとおり、同調性テストを得点化したことの効果はなかったが逆説的にいえば、従来の中間型に入るものを3群 (3点, 2点, 1点) に分けてみても見るべき成果のないことが明らかになった点の一つの収穫であった。

同調類型の中間型は、得点形式で細分しても今回の資料に関してはさして有効ではないので、再び中間型として一括して扱うこととし、(tab. 4a) に戻り、中間型と同調型とを取り出して比較してみたところ、 $\chi^2 = 3.88$ となり $P < 0.05$ レベルで有意な連合を示し、中間型に比して同調型はa指数が高いといえた。このことは、先にのべた同調型と非同調型との関係 ($P < 0.05$ レベルでは有意な連合傾向は得られなかった) と併せ考えると、われわれの仮説を部分的にしか肯定していない。しかしながら、これまでの分析は、同調類型は3型に分けられているが、a指数は高低2分割で行っており、同じくa指数低群に入っている非同調型の人びとのa指数より中間型の人たちのa指数の方が相対的には高いということはないであろうか。われわれの分析が頻度の傾向のみで行われているため、このままでは同じ低群の中にも存在する相対的な高低は不問に付されており、上の疑問には答えられない。そこで、a指数もほぼ3等分して低中高3群 (-0.15 点まで, $-0.16 \sim +0.21$, $+0.22$ 以上) に分けて 3×3 分割表を作ると (tab. 4c) となる。一見して明らかなように、非同調型はa指数低群にもっとも出現頻度が高く、中間型

(tab 4a) 同調類型とa指数

同 調 類 型		同 調			計
		非同調	中 間	同 調	
a 指 数	低	13	14	5	32
	高	11	8	11	30
	計	24	22	16	62

(tab. 4b) 同調得点とa指数

同 調 得 点						
		0	1	2	3	4
a 指 数	低	12	1	10	3	5
	高	11	2	4	2	11
計		24	3	14	5	16

(tab. 4c) 同調類型とa指数 (3×3分割表)

同 調 類 型			計		
a 指 数	非同調	中 間	同 調		
	10	8	2	20	
	6	11	5	22	
	8	3	9	20	
	24	22	16	62	

は中群で、同調型は高群で高く、われわれの予想した通りの分布を得た。

かくして、極めて明確にはいいがたいが、概してわれわれの予想通り、同調性テストで測定している同調傾向は、その人びとのもつ他者援助的傾向と共変する傾向を持つことを知り得た。

なお、「愛他心尺度の検討」の項で疑問として残された“SIV—B スコアとa指数との関係”について少しく検討を加えておこう。先述したように、われわれは、同調性テストにより捉えられる同調傾向は、相互性・交換性にもとづく他者援助傾向とは結びつくが、一方的な自己犠牲的他者援助とは必然的な関係を想定し得ないものと考えた。そして、上記の要請に応じる道具として Sawyer の尺度を取り上げ、一応所期の目的を達したのである。しかし、他方で Sawyer の尺度が他者援助傾向を測定し得ているか否かの検討の道具として SIV—B を用い、両者がある程度正の連合を示すことを知った。この両者は共に他者援助傾向の個人差を測定しようとしているのであるから、この結果は特別な矛盾ではないが、SIV—B が基本的には価値観テストであり、実際の質問項目も自己犠牲的他者援助とかかわるものが中心となっているように思われるので、相互的・交換的他者援助とかかわる筈の Sawyer の尺度とは、そのねらいの違いをなんらかの反応の中に反映していなければならない。しかし、先述の分析の範囲ではこのことについての知見を得ることができなかった。そこで、ここでは同調性テストと SIV—B スコア—との関係を分析している。Bスコア—が博愛的傾向を測定しているとしても、相互的傾向をもった愛他的同調とは必しも正の相関を生むものではないであろうと予想されたのであるが、結果も予想通り、両者はほとんど無相関であった。この結果により、同調性テストと Sawyer 尺度との正の相関関係の意味が一層はっきりしたものといえよう。

引用文献

- Asch, S. E 1951 : Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgments. In H. Guetzkow (ed) : Groups, leadership and men.
- Bass, B. M 1961 : Conformity, deviation, and a general theory of interpersonal behavior. In I. A. Berg et al. (eds.) : Conformity and deviation.
- Blau, P. M. 1964 : Exchange and power in social life.
(間場寿一他訳：交換と権力)
- Crutchfield, R. S 1955 : Conformity and character.
American Psychologist 10, 191-198.
- Eagly, A. H. 1978 : Sex differences in influenceability.
Psychological Bulletin, 85, 86-116.
- Gouldner, A. 1960 : The norm of reciprocity.
American Sociological Review, 25, 161-178.
- Rosenthal, R & Rosnow, R. L. 1975 : The Volunteer subject.
- Sawyer, J. 1969 : The altruism scale.
American Journal of Sociology, 71, 407-416.
- Witkin, H. A. 1962 : Psychological Differentiation.
- 菊池章夫・Gordon, L. V 1974 : 価値の比較社会心理学
- 田村節子・山本敦子, 1977 : 同調行動と個人要因
東京女子大学卒業論文(未発表)
- 中村陽吉, 1967 : 同調性テストの試案
人文学報 59号 45-60
- 中村陽吉, 1969 : 同調行動と個人特性
人文学報 67号 25-36
- 中村陽吉, 1976 : 援助行動の研究
人文学報 111号 11-22